

〈研究ノート〉

# 新約聖書テキストにおける異郷訪問譚と 裏返し構造の関係

「テトスへの手紙」と「ヘブル人への手紙」の場合

大喜多 紀明

## 1. はじめに

ある物語が、主人公にとっての異郷を訪問する形式によって構成されている場合、この物語の類型を異郷訪問譚という。異郷訪問譚には、異郷に行ったまま主人公が帰還しない「不完全」なタイプと異郷から帰還する「本格的」なタイプの分類<sup>(1)</sup>があるとされている。大林論文<sup>(2)</sup>では、ポップの知見<sup>(3)</sup>に基づき、いくつかの日本の異郷訪問譚が、上述のタイプの分類の如何に拘束されず「裏返し」による構造<sup>(4)</sup>がみとめられることを例示した。かつ、この構造が、異郷訪問譚における構造上の「共通の特徴」である蓋然性が高いことを示した。大林論文の知見を受けた依田論文<sup>(5)</sup>では、当該蓋然性の高さを検証すべく、韓国の異郷訪問譚に同様の構造的特徴がみとめられることを示した。さらに、筆者においては、異郷訪問譚に類別できるアニメーション映画<sup>(6)</sup>や漫画<sup>(7)</sup>、小説<sup>(8)</sup>などに裏返し構造がみとめられることを示した。以上の知見は、異郷訪問譚では一般的に裏返し構造がみとめられることを示したものである。一方、こうした一連の知見では、当該物語の類型が異郷訪問譚である場合に裏返し構造がみとめられることを示唆したのみにとどまっており、かかる構造が異郷訪問譚において限定的に出現するものであることが述べられた訳ではない。また、異郷訪問譚とはいえない物語における裏返し構造がみとめられる実例が示された訳でもない。

以上を踏まえ、筆者によるアイヌ口承テキスト<sup>(9)</sup>や聖書テキスト<sup>(10)</sup>を題材として分析した先行研究では、異郷訪問譚とはいえない物語であるにもかかわらず裏返し構造がみとめられる実例を示した。かつ、上述の先行研究では、かかる裏返し構造がみいだせることが、アイヌ口承テキストや聖書テキストの特性に起因するという仮説を提示した。一方、当該先行研究では、示された事例数は決して十分であるとはいえず、かかる仮説の蓋然性を検証するには、提示された以外のテキストに関する分析的知見を示す必要がある。また、とりわけ、聖書テキストの場合にはアイヌ口承テキストとは異なる課題点がある。つまり、ひとえに聖書テキストといっても、まずは、聖書そのものが旧約聖書<sup>(11)</sup>と新約聖書<sup>(12)</sup>から構成されている。また、それぞれの巻が著された年代や属性に差異があり、かつ、独自の編集過程を経て現在の各テキストが成立している。このことは、それぞれの巻は、同じく聖書に収納されているとはいえ、構造をひとまとめにして論じるべきでないことを示唆している。かかる前提のもと、本稿では、聖書テキストにおける、異郷訪問譚と裏返し構造の関連性を検証することにする。

異郷訪問譚とはいえず、かつ、裏返し構造であることがみとめられた聖書テキストは、構造レベルにおいては、現時点で、新約聖書における下記の6巻のみである。一方、旧約聖書については巻の一部分を検証した実例はあるものの、巻全体の構造レベルでは全く検証されていない。下記の表では、新約聖書における各巻と、当該検証がおこなわれたか否かを示した。なお、検証がおこなわれた巻については「○」が付されており、検証がおこなわれた論文に関する注を付帯した。

| 巻            | 検証                |
|--------------|-------------------|
| マタイによる福音書    |                   |
| マルコによる福音書    |                   |
| ルカによる福音書     | ○ <sup>(13)</sup> |
| ヨハネによる福音書    |                   |
| 使徒行伝         |                   |
| ローマ人への手紙     |                   |
| コリント人への第一の手紙 |                   |
| コリント人への第二の手紙 |                   |
| ガラテヤ人への手紙    |                   |
| エペソ人への手紙     |                   |
| ピリピ人への手紙     |                   |

|               |                   |
|---------------|-------------------|
| コロサイ人への手紙     |                   |
| テサロニケ人への第一の手紙 |                   |
| テサロニケ人への第二の手紙 |                   |
| テモテへの第一の手紙    |                   |
| テモテへの第二の手紙    |                   |
| テトスへの手紙       |                   |
| ピレモンへの手紙      | ○ <sup>(14)</sup> |
| ヘブル人への手紙      |                   |
| ヤコブの手紙        | ○ <sup>(15)</sup> |
| ペテロの第一の手紙     |                   |
| ペテロの第二の手紙     |                   |
| ヨハネの第一の手紙     |                   |
| ヨハネの第二の手紙     | ○ <sup>(16)</sup> |
| ヨハネの第三の手紙     | ○ <sup>(17)</sup> |
| ユダの手紙         | ○ <sup>(18)</sup> |
| ヨハネの黙示録       |                   |

以上を踏まえ、本稿では、現在まで検証されていない巻であるテトスへの手紙とヘブル人への手紙に注目し、異郷訪問譚と裏返し構造の関連性を検証する観点による検証をおこなうことにする。なお、本稿における検証は、まずは、テキストが異郷訪問譚であるか否かの判別をおこなう。続いて、そのテキストが裏返し構造と合致するか否かの判別をおこなうことにする。また、10節では、テキストにみいだされた構造の特徴を明らかにする目的で、裏返し構造における核の機能、および、要素どうしの対応の関係性に関する考察をおこなうことにする。

## 2. テキスト①

本稿の最初のテキストは、口語訳聖書<sup>(19)</sup>の新約聖書に収納されたテトスへの手紙である。テトスへの手紙は、伝統的にはパウロが著者である<sup>(20)</sup>。本稿では、これをテキスト①と呼ぶ。以下はテキスト①の全文である。なお、テキスト①には、便宜上、筆者によるアルファベットおよび記号を付した。一方、引用元の聖書に付されている章および節を示す数字、段落を省略した。

[A/] 神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから—わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた者たちの信仰を強め、また、信心にかなう真理の知識を彼らに得させるためであり、偽りのない神が永遠の昔に約束された永遠のいのちの望みに基づくのである。神は、定められた時に及んで、御言を宣教によって明らかにされたが、わたしは、わたしたちの救主なる神の任命によって、この宣教をゆだねられたのである—信仰を同じうするわたしの真実の子テトスへ。父なる神とわたしたちの救主キリスト・イエスから、恵みと平安とが、あなたにあるように。 [A] [B/] あなたをクレテにおいてきたのは、わたしがあなたに命じておいたように、そこにし残してあることを整理してもらい、また、町々に長老を立ててもらうためにほかならない。長老は、責められる点がなく、ひとりの妻の夫であって、その子たちも不品行のうわさをたてられず、親不孝をしない信者でなくてはならない。監督たる者は、神に仕える者として、責められる点がなく、わがままでなく、軽々しく怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、かえって、旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する者であり、教にかなった信頼すべき言葉を守る人でなければならぬ。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤りを指摘することができるためである。 [B] [C/] 実は、法に服さない者、空論に走る者、人の心を惑わす者が多くおり、とくに、割礼のある者の中に多い。彼らの口を封ずべきである。彼らは恥ずべき利のために、教えてはならないことを教えて、数々の家庭を破壊してしまっている。クレテ人のうちのある預言者が「クレテ人は、いつもうそつき、たちの悪いけもの、なまけ者の食いしんぼう」と言っているが、この非難はあたっている。だから、彼らをきびしく責めて、その信仰を健全なものにし、ユダヤ人の作り話や、真理からそれていった人々の定めなどに、氣をとられることがないようにさせなさい。 [C] [D/] きよい人には、すべてのものがきよい。しかし、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性も良心も汚れてしまっている。彼らは神を知っていると、口では言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。 [D] [E/] しかし、あなたは、健全な教にかなうことを語りなさい。老人たちには自らを制し、謹厳で、慎み深くし、また、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように勧め、年老いた女たちにも、同じように、たち居ふるまいをうやうやしくし、人をそしったり大酒の奴隷になったりせず、良いことを教える者となるように、勧めなさい。そうすれば、彼女たちは、若い女たちに、夫を愛し、子供を愛し、慎み深く、純潔で、家事に努め、善良で、自分の夫に従順であるよ

うに教えることになり、したがって、神の言がそしりを受けなくなるであろう。若い男にも、同じく、万事につけ慎み深くあるように、勧めなさい。あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう。奴隷には、万事につけその主人に服従して、喜ばれるようになり、反抗をせず、盗みをせず、どこまでも心をこめた真実を示すようにと、勧めなさい。そうすれば、彼らは万事につけ、わたしたちの救主なる神の教を飾ることになろう。[E] [F] すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。[F] [F´] このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。[F´] [E´] あなたは、権威をもってこれらのことを語り、勧め、また責めなさい。だれにも軽んじられてはならない。あなたは彼らに勧めて、支配者、権威ある者に服し、これに従い、いつでも良いわざをする用意があり、だれをもそしらず、争わず、寛容であって、すべての人に対してどこまでも柔和な態度を示すべきことを、思い出させなさい。[E´] [D´] わたしたちも以前には、無分別で、不従順な、迷っていた者であって、さまざまの情欲と快楽との奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み合っていた。ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。この言葉は確実である。わたしは、あなたがそれらのことを主張するのを願っている。それは、神を信じている者たちが、努めて良いわざを励むことを心がけるようになるためである。これは良いことであって、人々の益となる。[D´] [C´] しかし、愚かな議論と、系図と、争いと、律法についての論争とを、避けなさい。それらは無益かつ空虚なことである。異端者は、一、二度、訓戒を加えた上で退けなさい。たしかに、こういう人たちは、邪道に陥り、自ら悪と知りつつも、罪を犯しているからである。[C´] [B´]

わたしがアルテマスかテキコかをあなたのところに送ったなら、急いでニコポリにいるわたしの所にきなさい。わたしは、そこで冬を過ごすことにした。法学者ゼナスと、アポロとを、急いで旅につかせ、不自由のないようにしてあげなさい。わたしたちの仲間も、さし迫った必要に備えて、努めて良いわざを励み、実を結ばぬ者とならないように、心がけるべきである。[B´] [A´/] わたしと共にいる一同の者から、あなたによろしく。わたしたちを愛している信徒たちに、よろしく。恵みが、あなたがた一同と共にあるように。[A´]

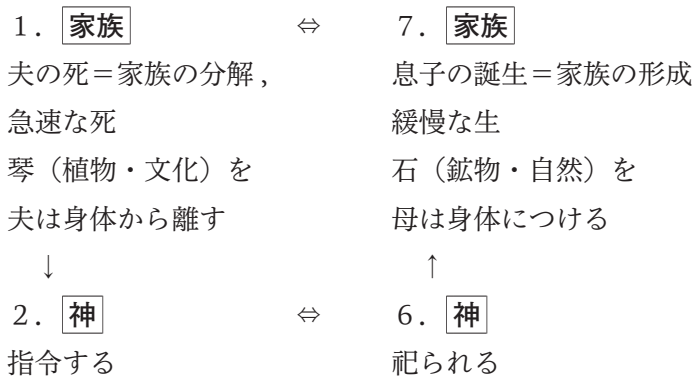
### 3. テキスト②

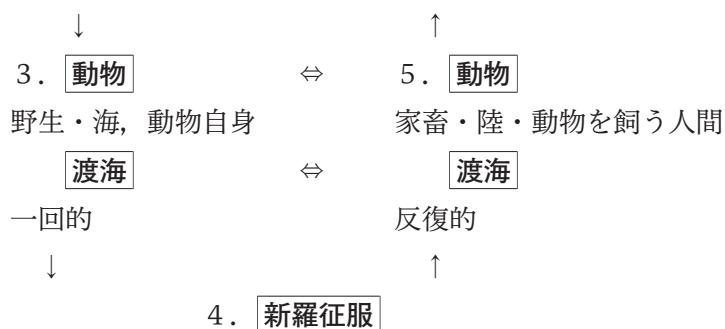
本稿のもう一つのテキストはヘブル人への手紙である。本稿では口語訳聖書の新約聖書に収納されたヘブル人への手紙をテキスト②と呼ぶ。ヘブル人への手紙の著者は、伝統的にはパウロとされることがあるが実際は明らかではない。テキスト②は、テキスト①に比べて長大であるため、本稿では全文引用はおこなわない。

ヘブル人の手紙の全体構造がキアスムスからなることについては、既に Gelardini が明らかにしている<sup>(21)</sup>。しかしながら、かかる構造が裏返し構造であるか否かに関する言及はない。本稿では、この Gelardini の知見に基づき、テキスト②が裏返し構造であるかの確認をおこなうことにする。

### 4. 裏返し構造

裏返し構造とは、異郷訪問譚にみとめられる構造的な特徴のことである。例えば、大林<sup>(22)</sup>は、典型的な異郷訪問譚の一つである「神功征韓譚」に次の構造がみとめられることを示した。





ここで、上図における1と7の要素のテーマは「家族」、2と6のテーマは「神」、3と5のテーマは「動物」と「渡海」、4のテーマは「新羅征服」である。この場合、物語としては、1から始まり7で終結するのだが、テーマとしては、1と7、2と6、3と5が対応しており、4は対応する要素がなく単独である。かつ、大林は当該物語を、「前半と同じテーマが後半にも出て来る場合、後半では前半の除去ないし否定」、「対立」、「対照」である事例と位置付け、かかる「除去」・「否定」・「対立」・「対照」の関係を、「裏返し」と呼んだ<sup>(23)</sup>。例えば2と6の対応の場合、双方は、「神」をテーマとしていながらも、内容は「指令する」と「祀られる」であり、裏返しの関係である。かつ、「神功征韓譚」は、1→2→3→4→5→6→7の順序で要素が配列している。

大林の知見を受け、筆者は、以下の特徴Aおよび特徴Bの双方の特徴を持つ構造を「裏返し構造」と定義した<sup>(24)</sup>。

特徴A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する。

特徴B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する。

本稿における「裏返し構造」の定義も上述のものと同様とする。なお、裏返し構造であるかの判別については、恣意性が介入する余地があることをここで述べておく。この点は、本稿における方法論上の課題点でもある。

裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位の概念として位置付けられる。裏返し構造の場合は、上述の特徴Aおよび特徴Bの双方の特徴を備える必要があるのであるが、キアスムスは、特徴Bを備える必要があるが、特徴Aについては必須ではない。つまり、下記のような同心円状の構造をキアスムスと呼ぶ。

$$A \rightarrow B \rightarrow \dots \rightarrow X \rightarrow \dots \rightarrow B' \rightarrow A'$$

なお、キアスムスの折り返し箇所であるXについては、本稿では「核」と呼ぶことにする。キアスムスには、核が対になるタイプと対にならないタイプがある。この点は、キアスムスの構造上の下位の構造である裏返し構造においても同様である。ちなみに、上述の「神功征韓譚」の場合は、核が対にならないタイプである。

森は、キアスムスの種類を、構成する対応のあり方から次の①～③の三種類に分類した<sup>(25)</sup>。そのうえで、「いかなる対応も、このうちのどれかに属する」<sup>(26)</sup>と述べた。

- ①相似的対応：キアスムスを構成するすべての対応が「相似的」である。
- ②対照的対応：キアスムスを構成するすべての対応が「対照的」である。
- ③混合的対応：キアスムスを構成する対応には「相似的」と「対照的」が混在している。

このうち、森が「対照的対応」と呼んだ構造が裏返し構造である。一般的には、キアスムスに注目した研究は、テキスト中にキアスムスがみいだせることを提示する観点と、かかるキアスムスをテキスト理解に利用する観点が多いが、Pelkey<sup>(27)</sup>やNänny<sup>(28)</sup>らによる一連の研究では、心性とキアスムスの関連性が言及されている。なお、他の聖書テキストを含め、聖書テキストにみとめられるキアスムス構造を示した先行研究は多くみられる<sup>(29)</sup>のだが、本稿でおこなうような、裏返し構造と異郷訪問譚の関連性を検証した先行研究は、本稿の1節で示したもの以外にはない。

## 5. 異郷訪問譚

大林の説によれば、裏返し構造は、異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」である。ここで、一般的には、異郷訪問譚とは、主人公（訪問者）が異郷を訪問する形式の物語をいう。しかしながら、大林論文では、異郷訪問譚の定義は明示されていない。

一方、勝俣は、異郷訪問譚の特徴について次のように述べた<sup>(30)</sup>。

異郷訪問譚とは、現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である。訪問者は神か人間であり、異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる。また、多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることは出来ない。



つまり、勝俣論文は、異郷訪問譚には以下の①から④の特徴を持つと述べた。

- ①異郷訪問譚とは、現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である<sup>(31)</sup>。
- ②訪問者は神か人間である<sup>(32)</sup>。
- ③訪問者が異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる<sup>(33)</sup>。
- ④多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることは出来ない<sup>(34)</sup>。

ここで、特徴④では、「多くの場合」という文言がある。したがって、これについては異郷訪問譚における一般的な特徴であるとはいえない。そこで、本稿では、特徴①～③のすべてを備えた物語を異郷訪問譚と呼ぶことにし、テキストが異郷訪問譚であるか否かを判別するための尺度とすることにする。そのうえで、特徴④を参考にすることにする。

## 6. テキスト①は異郷訪問譚であるか

本稿のテキスト①は、パウロによる手紙形式の文書である。一方、異郷訪問譚とは物語の形式の一種である。通念に基づけば、手紙とは、宛先人に対して差出人の意思を伝達する目的で書かれ、物語とはいえない。かつ、異郷訪問譚は物語形式の一種であるので、当然に、異郷訪問譚とはいえない。以上をふまえつつも、本節では、5節における異郷訪問譚の特徴①～③と照合することにより、テキスト①が異郷訪問譚の特徴を備えているかの確認をおこなう。

### ◆特徴①

テキスト①は、あくまでも、パウロがテトスに書いた手紙であり、誰かしらを主人公とし、主人公にとっての異郷へと訪問する物語は描かれていない。仮に著者パウロを主人公とみなしたとしても、手紙中でパウロは、テトスに依頼および指示をしており、異郷には訪問していない。したがってテキスト①は特徴①に合致しない。

### ◆特徴②

テキスト①は手紙であるので、誰かを主人公とはしていない。したがって、主人公は存在しないので神や人間ではない。仮に、パウロを主人公とすれば、パウロは人間で

あるので、特徴②には合致する。

◆特徴③

テキスト①は手紙形式であり、主人公の訪問の様子は書かれていないので、特徴③には合致しない。主人公を仮にパウロとした場合、パウロはどこかに訪問をする訳ではない。この仮定に基づいても特徴③には合致しない。

以上、テキスト①を特徴①～③と照合した結果、テキストはすべてが合致する訳ではない。たとえパウロを主人公とみなしたとしても、特徴②には合致するが、それ以外については合致しない。したがって、かかる仮定に基づいたとしても、テキスト①は異郷訪問譚ではない。

さらに、参考のため、特徴④との照合もおこなう。

◆特徴④

テキスト①はあくまでも手紙形式であり、少数による訪問に関する内容は書かれていない。仮にパウロを主人公としても、パウロの訪問自体がないため、テキスト①は特徴④に合致しない。

このように、テキスト①は、特徴④にも合致しない。

## 7. テキスト②は異郷訪問譚であるか

テキスト②も、テキスト①と同様に手紙形式の文書であるので、通念に基づく異郷訪問譚ではない。これを踏まえつつ、本稿では5節の異郷訪問譚の特徴との照合をおこない、かかる特徴を備えているか否かの確認をする。

◆特徴①

テキスト②は、伝統的にはパウロであるとされることがある人物がヘブル人に向けて書いた手紙の形式を持つ文書であり、誰かしらを主人公に見立てて書いた物語ではない。主人公が存在しないため、当然に、主人公が異郷に訪問する出来事は描かれていない。したがって、テキスト②は特徴①に合致しない。

◆特徴②

テキスト②は手紙形式であり、誰かを主人公とした物語形式ではない。よって、主人公は当然に神や人間ではないので、特徴②には合致しない。

◆特徴③

テキスト②では、物語の主人公はおらず、主人公による異郷への訪問はない。したがって、特殊な手段・方法による訪問もないので、テキスト②は特徴③に合致しない。

以上のように、テキスト②は、特徴①～④のすべてに合致しないため、異郷訪問譚ではない。

さらに、特徴④についても照合する。

◆特徴④

テキスト②には、主人公の訪問がないため、選ばれた少数者による訪問もない。したがってテキスト②は特徴④に合致しない。

このように、テキスト②は、特徴④にも合致しない。

## 8. テキスト①の構造

本節では、まず、テキスト①に付したアルファベット・記号に基づいた図式を示す。

|                   |   |                    |
|-------------------|---|--------------------|
| <u>A 挨拶</u>       | ⇔ | <u>A´ 挨拶</u>       |
| 個人と個人             |   | 集団と集団              |
| ↓                 |   | ↑                  |
| <u>B テトスの所在</u>   | ⇔ | <u>B´ テトスの所在</u>   |
| 留滞                |   | 招請                 |
| ↓                 |   | ↑                  |
| <u>C 異端者への対処</u>  | ⇔ | <u>C´ 異端者への対処</u>  |
| 積極的介入             |   | 消極的介入              |
| ↓                 |   | ↑                  |
| <u>D 不信仰者の行く末</u> | ⇔ | <u>D´ 不信仰者の行く末</u> |
| 失格者               |   | 御国をつぐ者             |

|   |   |   |
|---|---|---|
| ↓ |   | ↑ |
| ↓ | ⇔ | ↑ |
| ↓ | ⇔ | ↑ |
| ↓ | → | ↑ |

|   |   |   |
|---|---|---|
| ↓ | ⇔ | ↑ |
| ↓ | ⇔ | ↑ |
| ↓ | → | ↑ |

AとA´は、ともに、「挨拶」がテーマである。ただし、Aでは、パウロがテトスに、つまり、個人が個人に挨拶をしている。それに対し、A´では、パウロ一同からテトス一同へ、つまり、集団から集団に挨拶をしている点が対照的である。

BとB´のテーマは「テトスの所在」である。Bでは、パウロがテトスをクレタに留まらせた理由が述べられている。それに対し、B´では逆に、テトスがクレタに留まることをパウロが否定し、ニコポリを訪れることを要請している。つまり、BとB´でのパウロにおけるテトスへの要請は、クレタでの「滞留」と「滞留の否定」であり、双方は対照的である。

CとC´のテーマは、「異端者への対処」である。Cでは、「法に服さない者」、「空論に走る者」、「人の心を惑わす者」などが多くいることを述べ、こうした人々には断固とした対処が必要であり、かつ、改心を促すべきであるという、パウロによるテトスへの指導が述べられている。それに対し、C´では、かかる異端者に対しては「訓戒を加えた上で退け」るよう、パウロはテトスに指導している。つまり、Cにおけるパウロの指示は、厳しく責め改心させるという積極的な介入であるが、対照的に、C´では、訓戒し退けるという消極的な介入である。

DとD´のテーマは、ともに「不信仰者の行く末」である。Dでは、パウロは、かかる不信仰者を「失格者」とみなしている。対し、D´では、実はパウロたちもかつては不信仰者であったが、「神のあわれみ」により救済されることで、「御国をつぐ者」となった。これは、「失格者」の「否定」を意味するものである。

EとE´についてである。EとE´のテーマはパウロによる「テトスへの勧め」である。Eでは、パウロがテトスに対して、人に教える場合には、「あなた自身を良いわざの模範として示し」、「清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いること、つまりは、テトス自身が「率先垂範」すべきであることが述べられている。逆に、E´では、「権威をもってこれらのことを語り、勧め、また責め」ること、つまりは、「権威的な勧め」の必要性があることが述べられている。ここで、人に教える手法としての「率先垂範」と「権威的な勧め」は対照的である。

FとF´は、「イエスによる救済」がテーマである。ここで、Fでは、「すべての人を救う神の恵みが現れた」と述べられており、イエスの救済の対象が「すべての人」（つまり普遍的）であることが示されている。それに対し、F´では、「良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない」と述べられており、イエスの救済の対象が、あくまでも「良いわざに熱心な選びの民」であり、限定的であることが示されている。ここで、「普遍的」と「限定的」は対照的な概念である。

以上を、3節の裏返し構造の特徴Aおよび特徴Bと照合してみる。まず、テキスト①における、A・A´からF・F´のすべては、それぞれ同一のテーマでありながらも裏返しの関係である。この点は、特徴Aと合致する。また、テキスト①は、A→B→C→D→E→F→F´→E´→D´→C´→B´→A´の順序で配列している。この点は、特徴Bと合致する。したがって、テキスト①は特徴Aと特徴Bの双方に合致しているのだから、裏返し構造である。なお、テキスト①における核はF・F´である。

ところで、「テトスへの手紙」のテキスト全体にみとめられるキアスムス構造については、例えば Jeon は、次の図式を示した<sup>(35)</sup>。

A 1: 1-4: Paul to Titus according to Faith on the Basis of the Hope of Eternal Life

B 1: 5-13a: Exhort with Sound Doctrine and Reprove Opponents

B´ 1: 13b-3: 3: Reprove and Exhort with Sound Doctrine as We Await Our Savior

A´ 3: 4-15: Justified by Grace in Faith According to the Hope of Eternal Life

ここでのAとA´に関する解説では、A´がAの「除去」、「否定」、「対立」、「対照」のいずれかであることを述べていない。また、BとB´についても、B´がBの裏返しであることの言及はない。したがって、Jeonの図式が示す構造は、当該図式がキアスムスであることを述べているものの、裏返し構造であることについては述べていない。Jeonの図式と本稿での図式の関係性については今後考察するつもりである。

## 9. テキスト②の構造

以下は、Gelardiniが明らかにしたテキスト②のキアスムス構造<sup>(36)</sup>である。

- A 1:1-2:18 : Elevation and abasement of the Son  
 B 3:1-6:20 : Faithlessness of fathers and sons  
 C 7:1-10:18 : New covenant and cult institution  
 B´ 10:19-12:3 : Faith of sons and fathers  
 A´ 12:4-13:25 : Abasement and elevation of the sons

Gelardiniによれば、テキスト②は、AとA´、BとB´がそれぞれ要素どうしの対応であり、Cを転回点とするキアスムスである。Aには、本来は「Son (=御子・イエス)」が「angels (=天使たち)」の上位にあるにもかかわらず、それが下位になることにより、「sons (=信徒たち)」を救済することができたことが述べられている。それに対し、A´には、「sons」が高められたことが書かれている。これに対し、Gelardiniは、双方の関係を「inverse correspondence (=逆対応)」であると述べた。また、Bには多くの「faithlessness (=不信仰)」に関する事柄が記されており、B´には「faith (=信仰)」に関する事柄が述べられている。これに対し、Gelardiniは双方を「inverse correspondence」の関係であると述べた。ここでの、AとA´の関係は、Aで低かった信徒たちの立場がA´において高くなっており、双方は対照的である。また、BとB´についても、不信仰と信仰に関する事柄であり、双方は対照的な関係である。つまり、「inverse correspondence」は、事実上、裏返しの関係であるといえる。したがって、Gelardiniが示したキアスムスは裏返し構造でもある。なお、テキスト②における核はCである。

ここで、Gelardiniの構造を、8節でのテトスへの手紙における裏返し構造の図式と同様の形式で表現した場合、以下の図式となる。

|                     |   |                  |
|---------------------|---|------------------|
| <u>A 立場の変化</u>      | ⇔ | <u>A´ 立場の変化</u>  |
| イエスの降下              |   | 信徒の上昇            |
| ↓                   |   | ↑                |
| <u>B 信仰と不信仰</u>     | ⇔ | <u>B´ 信仰と不信仰</u> |
| 不信仰に関する記事           |   | 信仰に関する記事         |
| ↓                   |   | ↑                |
| <u>C 新しい契約と教団制度</u> |   |                  |

つまり、A・A´は「立場の変化」がテーマであり、Aではイエスの立場が下降するのに対し、A´では信徒の立場が上昇する。また、B・B´は「信仰と不信仰」がテ

マであり、Bでは不信仰に関する記事が示されているのに対し、B´では信仰に関する記事が示されている。なお、Cは核であり、「新しい契約と教団制度」がテーマである。

## 10. 核の機能

本節では、8節で示されたテキスト①の核F・F´、および、9節で示されたテキスト②の核Cの機能を考察する。

森は、キアスムスの核は、キアスムスの中心を示す形式的機能と、テキストのメッセージの指標としての内容的機能を持つと述べた<sup>(37)</sup>。

さて、何対かの対応に囲まれて構造の中央に位置しているのが<核>である。テキストの各要素は対応を重ねながら、この核にむかって集中する。そして、しばしばそこにテキストの隠れた意図の集約的表現が見受けられる。その意味では、核はテキストの構造上の中心としての形式的機能を持つだけでなく、テキストに隠されたメッセージの指標として内容的機能をも担っているといえよう。

ここで、テキスト①およびテキスト②の核は、それぞれのキアスムスの中央部分に位置するので、従来通り、これらの核はキアスムスの中心を示す形式的機能を持つ。

続いて、両テキストの核における内容的機能についてである。テキスト①の場合、核はF・F´であり、ここには、「イエスによる救済」が配置されている。つまり、森の見解に基づけば、かかる「イエスによる救済」が当該テキストにおける「隠れた意図の集約的表現」であり、「メッセージの指標」である。また、かかる核を中心にテキストの対応が重ねられている。キアスムスを構成する対応のうちの一方向の要素だけでは、単なる出来事の記述としての意味しかない。例えば、A, B, C, D, Eは、それだけでは出来事の羅列であるといえる。また、A´, B´, C´, D´, E´についても同様である。これらが核により連結されることにより、テキスト全体のメッセージが完成するのである。また、テキスト②の核は、「New covenant and cult institution (=新しい契約と教団制度)」であり、これがテキスト②における「隠れた意図の集約的表現」であり「メッセージの指標」であるといえる。

## 11. おわりに

本稿では、新約聖書に収納された巻であるテトスへの手紙とヘブル人への手紙をテ

キストとし、まず、かかるテキストが本稿の定義に基づく異郷訪問譚といえるかの確認をした。そのうえで、特徴Aおよび特徴Bと照合することにより、当該テキストが裏返し構造といえるかの検証をおこなった。その結果、当該テキストは、本稿の定義に基づく異郷訪問譚ではなく、かつ、特徴Aと特徴Bの双方と合致することから裏返し構造であることがわかった。

ここで、こうした対応の種類に関する検討は、恣意性が介入する余地があるといえる。かかる恣意性の介入について、これを排除する試みもされてきた<sup>(38)</sup>ものの、こうした問題は、引き続き、方法論上の課題として残っているといえる。また、ひとえに裏返しの関係といっても、その程度や種類の差異が存在するであろう。例えば、テキスト①のAとA´の関係については、「挨拶」がテーマであり、「個人と個人」と「集団と集団」が対応している。この場合の裏返しの関係は、「個人」と「集団」という「規模」の差異であるといえる。一方、B・B´は、「テトスの所在」についてであり、パウロがテトスに「留滞」を要請したか、「招請」を要請したかの差異である。このように、ひとえに裏返しといっても、「規模」の対照性なのか、「要請」の対照性なのかという違いがある。つまり、裏返しに対する下位の分類を採用することによって、より詳細な裏返し構造の特性が明らかになるといえる。以上のように、恣意性の排除や、裏返し構造の下位概念の存在に関する検討も今後の検証すべき課題である。

従前の知見とあわせると、新約聖書では27巻中8巻が検証されたことになる。筆者としては今後も引き続き、他の巻に関する検証をおこなうつもりである。

## 注

- (1) 大林太良, 1979, 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』, (2), p.1-19.
- (2) 大林 (1979).
- (3) 大林 (1979) は、ルーマニアの論文誌『Folclor Literar』(1967年出版)に収録されたポップの論文「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」を引用している。
- (4) 本稿ではこれを「裏返し構造」と呼ぶ。
- (5) 依田千百子, 1982, 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』, (5), p.47-57.
- (6) 大喜多紀明, 2017, 「映画化により『借りぐらしのアリエッティ』は何を「獲得」したのか: 原作小説『床下の小人たち』との対比から」『国語論集』, (14), p.78-92.
- (7) 大喜多紀明, 2020, 「小山ゆう『チェンジ』にみられる裏返し構造: 漫画作品における異郷訪問譚の事例」『人間生活文化研究』, (30), p.146-150.
- (8) 大喜多紀明, 2018, 「芥川龍之介『トロッコ』の裏返し構造: 良平の「新生」場面の機能」『国



語論集』, (15), p.45-52.

- (9) 大喜多紀明, 2016, 「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造: 異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』, (14), p.45-72.
- (10) 大喜多紀明, 2017, 「聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造: 異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例」『北海道言語文化研究』, (15), p.195-216.
- (11) 旧約聖書は合計39巻により構成されている.
- (12) 新約聖書は合計27巻により構成されている.
- (13) 大喜多紀明, 2018, 「ルカによる福音書9章51節~19章46節にみられる裏返し構造: 対称性仮説に関する検証に向けて」『人間生活文化研究』, (28), p.610-618.
- (14) 大喜多紀明, 2019, 「新約聖書に収納された「ピレモンへの手紙」にみられる裏返し構造」『人間生活文化研究』, (29), p.293-298.
- (15) 大喜多紀明, 2019, 「新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造: 「物語」とはいえないテキストの事例」『人間生活文化研究』, 2019, (29), p.15-21.
- (16) 大喜多紀明, 2020, 「新約聖書に収納された「ヨハネの第二の手紙」の構造: 裏返し構造をあてはめる観点からの分析」『人間生活文化研究』, (30), p.308-311.
- (17) 大喜多紀明, 2021, 「新約聖書「ヨハネの第三の手紙」にみられる裏返し構造」『人文×社会』, (1), p.451-459.
- (18) 大喜多紀明, 2020, 「新約聖書「ユダの手紙」にみとめられる裏返し構造」『人間生活文化研究』, (30), p.353-357.
- (19) 日本聖書協会. 聖書. 日本聖書協会, 1989.
- (20) テキストの著者は伝統的にはパウロであるが異説もある. しかし, 本稿の目的は, かかる著者がパウロであることの真贋を問うところがない. 以上を踏まえ, 本稿ではテキストの著者を, 便宜上「パウロ」とする.
- (21) Gelardini, G, 2009, From “Linguistic Turn” and Hebrews Scholarship to *Anadiplosis Iterata*: The Enigma of a Structure, *Harvard Theological Review* 102, 51-73.
- (22) 大林 (1979).
- (23) 本稿でも, かかる関係を「裏返し」と呼ぶ.
- (24) 大喜多 (2016).
- (25) 森彬, 2007, 『ルカ福音書の集中構造』, キリスト新聞社.
- (26) 森彬 (2007).
- (27) Pelkey, J, 2013, Cognitive chiasmus: Embodied phenomenology in Dylan Thomas. *Journal of literary semantics*, 42(1), pp. 79-114.
- (28) Nänny, M, 1988, Chiasmus in literature: Ornament or function?, *Word & Image*, 4(1), pp.

51-59.

- (29) 例えば ; Lund, NW, 1941, *Chiasmus in the New Testament*. Diss. The University of Chicago.
- (30) 勝俣隆, 2009, 『異郷訪問譚・来訪譚の研究 : 上代日本文学編』, 和泉書院 .
- (31) 本稿ではこれを「特徴①」と呼ぶ.
- (32) 本稿ではこれを「特徴②」と呼ぶ.
- (33) 本稿ではこれを「特徴③」と呼ぶ.
- (34) 本稿ではこれを「特徴④」と呼ぶ.
- (35) Jeon, SP, 2012, *To Exhort and Reprove: Audience Response to the Chiastic Structures of Paul's Letter to Titus*. Pickwick Publications.
- (36) Gelardini (2009).
- (37) 森彬 (2007).
- (38) 大喜多紀明, 2019, 「樺太アイヌ口承テキスト「水汲みの話」の分析 : 述語的論理が優先された事例」『北海道言語文化研究』, (17), p.19-36, 北海道言語研究会. ; この論文では, 述語の様態の観点から, 対応の種類に介入する恣意性の排除を試みている.